

CBRC Newsletter

<http://www.cbrc.jp/>

AUTUMN 2009

29



松井よりイチロー



ポール ホートン
(Paul HORTON)
配列解析チーム長

エッセー ● ● ● 1

トピックス(エキスポ・BiWO2009) ● ● ● 2

研究紹介(中津井) ● ● ● 3

お知らせ・成果紹介・研究員紹介 ● ● ● 4

私の野球との付き合いは短く、しかも限りなく格好悪い出来事で終わったものでした。小学生のころにチームにり、左利きということで一塁を守ることになりました。そこまではよかったのですが、なんと最初の試合のウォーミングアップで私が相手のバッティング練習をぼんやり眺めていたら、味方がキャッチボールのつもりで私に投げた球が顔に直撃しました。失神、退場、入院、そして鼻の手術という展開を経て、結局私は野球に向いていないという結論に至りました。

それでも、朝のニュースで松井やイチローの報道を見ることはあります。松井のホームランは凄いとは思いますが、私はイチローのプレイに、より感動します。感動するのはイチローの足の速さです。他の打者なら、どうみてもヒットにならない当たりでも、イチローはヒットにしてしまいます。

生命情報科学にも素早さが求められます。少人数でプロジェクトを組む生命情報学者が、最新鋭の測定機器を駆使する大物のウェット・ラボと真っ向勝負してホームランを打つことは難しいでしょう。しかし、ウェット・ラボの大型実験装置と生物種や実験法に特化したノウハウは強味と同時に、足枷にもなり得ます。線虫の研究室では普通ショウジョウバエの実験をしませんし、NMRの専門家は遺伝子発現の測定は行いません。しかし、生命情報科学者なら、月水金は真核生物の転写制御、火木は原核生物タンパク質のアミノ酸配列解析、そして土日は医学文献の調査、という研究スタイルも成り立ちます。

最近、CBRCの3人(今井研究員、Gromiha主任研究員と私)がミトコンドリア外膜プロテオームに関する新説(Cell 2008)を提唱しましたが、本来、私達はミトコンドリアの専門

家ではありません。きっかけは、たまたま私の目についた、個別なタンパク質に関する論文でした。私はその論文にみられた現象の汎用性を試したいことから研究が始まりました。この研究テーマは今も続き、最近では日本・スウェーデンの国際交流にも発展していますが、最初の成果は着想から2ヶ月程度の時点で既に出ていました。この短期間に出した成果は、公開データと汎用性の高い解析法といった生命情報科学の特徴が可能にしました。

私は今後も幅広く論文を調査し、良いタイミングで情報解析に適した実験結果をキャッチし、着実にヒットを打っていくことを目指したいと思っています。

